

〔研究ノート〕

佐藤吉五郎による幼児への和音感教育実践

— 岡山県女子師範学校で生まれた課題意識から —

鈴木 慎一郎\*

はじめに

本稿の目的は、佐藤吉五郎が行った幼児への和音感教育実践について、彼の実践に関する資料を通して明らかにすることにある。

『和音感教育』の著書である佐藤は、磯田三津子が記した『日本音楽教育事典』では、「昭和初期より単音、および和音の構成音の聴き取りによる絶対音感の育成をめざす和音感教育を推進した人物」と紹介される<sup>1</sup>。

「和音感教育」「聴覚訓練」に類似した用語として「音感訓練」「音感教育」「音感指導」「聴音練習」「基礎練習」等がある。本稿では、佐藤の実践を中心に上げるため、佐藤が使用した「和音感教育」を使用する。ただし、国民学校や師範学校の規定では、「聴覚訓練」と記されているため、その箇所については「聴覚訓練」を用いる。

1941（昭和16）年の「国民学校令施行規則」第十四条の「鋭敏ナル聴覚ノ育成ニカムベシ」の規定を受け、国民学校では聴覚訓練が開始される<sup>2</sup>。1943（昭和18）年の「師範学校教科教授及修練指導要目」には、「聴覚訓練」という新領域が置かれ、師範学校においても聴覚訓練が実践された<sup>3</sup>。

これまでに筆者は、聴覚訓練の先行研究を概観し、師範学校における聴覚訓練の実践事例について考察した<sup>4</sup>。その結果、聴覚訓練の普及には、師範学校が重要な役割を果たしていたことが明らかとなった。具体的には東京音楽学校で実施された講習会に師範学校の教員が参加し、その内容を師範学校に持ち帰り、現職教員や師範学校生徒に伝達した。特に1941（昭和16）年6月28日の「国民学校芸能科音楽講習」では、国民学校教師用指導書や「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」（コロンビアSPレコード33742・33743・33744・33745）を資料として聴覚訓練の内容と指導方法が伝達された。SPレコードは、コロンビアの他にも、テイチク、キング、ポリドール、タイヘイ、ピクチャー、ニッチクの複数社から出され、「航空機爆音」を録音したSPレコードも存在した。このように聴覚訓

\*保育科

Shinichiro SUZUKI : Chord Acoustic Training for Kindergartners by Kichigoro SATO : Sharing Problem Consciousness Brought about in Okayama Girls' Normal School

練の普及ならびに実践には、SPレコードが重要な教材であった。SPレコードのタイトルの大部分が国民学校の教材である中、唯一、ビクターから佐藤の「幼稚園の音感」が出されていた。

佐藤は岡山県女子師範学校教諭の後、1934（昭和9）年、大阪府堺市視学へ転出し、1937（昭和12）年から、和音感教育を実践する。その成果は1940（昭和15）年、『和音感教育』として出版される。1943（昭和18）年、佐藤は「聴覚訓練準備調査会」の委員も委嘱される<sup>5</sup>。

さらに戦後においても佐藤の実践は続く。1951（昭和26）年、「文部省教育課程研究・実験学校」として指定された東京都中野区立江古田小学校と神奈川県鎌倉市立玉縄小学校では、読譜指導の研究が行われた<sup>6</sup>。東京都中野区立江古田小学校では「移動ド唱法」、神奈川県鎌倉市立玉縄小学校では「固定ド唱法」の実践がなされ、佐藤は神奈川県鎌倉市立玉縄小学校の指導にかかわった<sup>7</sup>。結局、1958（昭和33）年の「学習指導要領」では「歌唱指導においては、移動ド唱法を本体とする」と規定された<sup>8</sup>。とはいうものの、「固定ド唱法」は、桐朋学園の「子供のための音楽教室」等をはじめとして早期教育の場においては絶対音感の育成と結び付け積極的に取り入れられている<sup>9</sup>。

佐藤に関する先行研究について概観すると、木村信之は佐藤に対しインタビュー調査を行い、「堺市における和音感教育の推進」者として取り上げている<sup>10</sup>。山下薫子は、佐藤の指導を受けた堺市立第一幼稚園長の北山ナホについて触れている<sup>11</sup>。上田誠二は、佐藤を関西での和音感教育の実践者として捉えている<sup>12</sup>。その他、先述の磯田によって佐藤の業績や生涯が整理されている<sup>13</sup>。上記の研究では、佐藤の人物や和音感教育の成果を概観し、幼児にとって有効であった点が指摘されてはいるものの、具体的な実践事例については検証されていない。また、SPレコードの存在についても取り上げられていない。佐藤は戦前から戦後にかけて、日本の音楽教育の唱法の在り方に影響を与えてきた。そのため佐藤がどのような和音を用い、どのような方法で幼児に実践したかについてつづきに検証することが必要である。

佐藤は自分の著書の中で述べている通り、彼が在職した岡山県女子師範学校の音楽教育実践での課題が、和音感教育を生み出す源になっている。そこで研究の対象とする主な時期は、佐藤が岡山県女子師範学校に着任した1926（大正15）年から、和音感教育を実践した大阪府堺市視学であった1943（昭和18）年までとする。研究方法としては、まず、岡山県女子師範学校における佐藤の音楽教育実践を概観する。次に、佐藤が立案した「保育実際案」やSPレコードを基に、佐藤の和音感教育実践の実際をたどる。

## 1. 岡山県女子師範学校と佐藤吉五郎

表1は佐藤の略年譜である。佐藤が和音感教育の実践を開始したのは、大阪府堺市視学

であった1937（昭和12）年以降である。ここでは、堺市視学に転出する直前の岡山県女子師範学校における佐藤の音楽教育実践を概観したい。

表 1 佐藤吉五郎の略年譜

年	生涯
1902（明治35）	秋田県にて誕生
1921（大正10）	秋田県師範学校卒業後教職に就く
1923（大正12）	東京音楽学校甲種師範科入学
1926（大正15）	東京音楽学校甲種師範科卒業。岡山県女子師範学校の教諭となる
1934（昭和 9）	大阪府堺市視学に転出
1937（昭和12）	堺市の小学校・幼稚園においてドイツ音名を用いた和音感教育の実践を行う
1940（昭和15）	『和音感教育』出版
1943（昭和18）	神奈川県久里浜の海軍対潜学校の教官となる 「聴覚訓練準備調査会」の委員として追加委嘱される
1947（昭和22）	神奈川県鎌倉市立大船中学校の教諭となる
1951（昭和26）	文部省実験校であった鎌倉市立玉縄小学校にて固定ド唱法の指導を行う
1954（昭和29）	神奈川県鎌倉市立大船中学校を退職 退職後は個人指導と和音感教育を行う
1991（平成 3）	神奈川にて没

出典 日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』2004年、音楽之友社、木村信之『音楽教育の証言者たち上 戦前を中心に』音楽之友社、1986年から作成。

戦前、保育者養成制度は確立されておらず、小学校教員の資格がそのまま「保姆」の資格となっていた<sup>14</sup>。1940（昭和15）年3月に実施した文部省の調査資料では、保姆養成機関について「東京、奈良両女高師附設のものが官立であり、千葉女子師範保姆養成科が公立である外は、凡て私立である。但し岡山のものは県が講習会の形式で営んでゐるものであって特殊のものである」と報告される<sup>15</sup>。

『岡山県保育史』によると、岡山県女子師範学校教諭と岡山県女子師範学校附属幼稚園主任保姆が、「岡山県開設保姆養成講習会」の講師であったことが記される<sup>16</sup>。また、永井理恵子によると、岡山県女子師範学校附属幼稚園の園舎には、「①園庭側廊下型平面計画、②内外空間連結の向上、③遊戯室機能拡大」の特徴が見られるという<sup>17</sup>。このようなことから、岡山県女子師範学校は、保育者養成や幼児教育にとって先進的な存在であったことが分かる<sup>18</sup>。

では、佐藤は岡山県女子師範学校においてどのような実践を行っていたのだろうか。上記で述べた通り、岡山県女子師範学校は保育者養成や幼児教育に対し先進的な取り組みを行っていたとはいうものの、佐藤が積極的に保育者養成や幼児教育に関わったという資料を得ることはできなかった。筆者が、佐藤が岡山県女子師範学校に在職していた時期に岡山県女子師範学校附属小学校訓導を務めていた恒次恒次氏に聞き取り調査を行った結果（下記）も同様に、幼児教育との関係は薄かった<sup>19</sup>。

- ・佐藤氏はその当時、多少、和音に興味を持っていたようだが、特別な音感訓練は行っていなかった。
- ・佐藤氏はヴァイオリンを得意としたため、ヴァイオリンのホームレッスンを行っていた。また、運動会の際には、オルガンでは旋律線が弱いため、佐藤氏自らヴァイオリンでメロディーを弾いたこともあった（その際にはマイクを付けた）。
- ・附属小学校にもよく来られ、小学生たちにも「唱歌」の指導をした。子どもがどなって歌うことを心配され、「お口を開けて、小さな声で、力を入れて歌いましょう」と弱声発声の指導を行った。

（2005年6月3日 於：岡山県和気郡和気町 恒次恒次氏からの聞き取り調査）

※岡嶋信夫氏（岡山師範学校卒業生）も同席

しかし、佐藤は岡山県女子師範学校での音楽教育実践の様子について「歌唱においては、音程が悪い、譜がよめない、3部4部合唱に苦勞する、オルガン・ピアノは弾けない、音記憶のない理論に苦勞する。したがって教授方法が分からない、というような問題があった」と回想する<sup>20</sup>。この点について磯田は「岡山県女子師範学校で勤務した10年間は、移動階名唱教育を用いた実践に悩んだ時期」と捉え、「岡山県女子師範学校における指導から、佐藤は、第1に、移動階名唱法が楽譜を読むことをむずかしくさせ、学生の混乱を招いていること、第2に、音楽教育において和音を教えていないことが、複雑な和音を用いる西洋音楽の理解を困難にさせているという問題を認識していた。この当時の経験は、その後、佐藤が和音感教育を精力的に展開するきっかけとなる」と解説する<sup>21</sup>。とはいえ、十代後半の生徒に絶対音感を身に付ける時期を逸しているため、移動階名唱法で相対音感を習得することが当然の方法である。今日の学校音楽教育においても、移動ド唱法が推奨されている。佐藤は移動階名唱法の弊害を主張しているけれども、移動階名唱法に課題があったのではなく、移動階名唱法の段階を踏んだ指導がなされていなかったことに原因があったように思われる。

その他、下記では「ピアノ20台、オルガン30台」とあり、佐藤は設備面の充実にも力を入れていた。「さらに正科の授業の外に、放課後は大勢の生徒の器楽検閲に、毎日超過勤務の連続であった」とのことから、鍵盤楽器の指導に没頭していたことが読み取れる<sup>22</sup>。

ピアノ一括購入の事、本校に這入つて間もない事である、当時校内にピアノ八台オルガン五十台あり、ピアノの実技演習の能率の大なる事近々小学校にもピアノの普及する事及女教員の特質發揮の意味から、ピアノ十二台を購入して二十台とし、オルガンを三十台に削減して数人に楽器一台を与えピアノは四年以上二部に使用させる目的であつた。

当時一台七百元、一年半間に三台、四年半後に十二台、その手始めに三台を購入した。午前六時から、午後六時まで鳴り続けた。

当時二台を有した男子師範が普通であるからこれで女子師範は全国で珍らしく多い方であろう。費用は従来通りの楽器使用料で足りたのである。他の学校からピアノ購入法を尋ねて来た位である。佐藤吉教諭の教授力と相俟ち断然頭角を現はすだろう。

（岡山県女子師範学校編『記念誌岡山県女子師範学校』1932年、143頁）

以上、佐藤は保育者養成や幼児教育に関する直接的な実践を行ったとはいえないので、生徒たちへの音楽指導を熱心実践していたことは明らかである。佐藤の回想や磯田

の指摘にもあったように、生徒たちが抱える音楽教育の課題が、和音感教育を生み出す背景にあったと捉えることができる。

## 2. 佐藤による幼児への和音感教育実践の内容

木村のインタビューで明らかにされている通り、佐藤は1935（昭和10）年、箕田光吉<sup>23</sup>の弟子で小石川の金富小学校の教師をしていた佐々木幸徳の授業を参観する<sup>24</sup>。佐藤は「全鍵盤の単音、和音をすべて記憶しているのにあきれた」と述べる<sup>25</sup>。佐藤が推進した堺市の和音感教育の概要については、木村によって以下のように整理される。

### <堺市の和音感教育>

- ・1937（昭和12）年4月から、堺市の小学校20校、幼稚園5園で、ドイツ音名を用いて、和音感教育を一斉に実施。
- ・ハーモニカと佐藤吉五郎考案の和音笛（日本楽器が製造）を全員に持たせ、和音伴奏を付けて器楽合奏を行った。
- ・幼稚園では、基礎訓練をすべて遊戯化して行ったので、おおいに学習効果が上がり、初見で16小節の二部合唱ができるほどになった。
- ・安井小学校…全市の小学校から4年以上の児童を集め、教壇を5段積んで、その上で指揮をし、合唱の大デモンストレーションをした。
- ・第一幼稚園…陸軍の技術将校を案内。

（木村信之『音楽教育の証言者たち 上：戦前を中心に』音楽之友社，1986年，200-201頁）

佐藤は1939（昭和14）年11月25日、東京音楽学校において開催された「教育音楽研究大会」において「和音感教育実施成績報告」を行う<sup>26</sup>。また、佐藤は戦後その成果について次のように回想する。

（陸軍技術研究所の将校を）幼稚園へ連れていって、「この中から無作為に10人子どもを選んでくれ」といって、目隠しをしてズラッと並べて、レコードをかけたわけだ。「アメリカの飛行機の音が聴こえたら手を上げよ、聴こえなかったら手を下ろせ」と。これだけいってね。そうしたら百発百中なんだ。どうしてこれがわかるんだ、不思議だと。わかるはずがないと思うのにわかるんだな。

こんなものは簡単ですよ。2オクターブ上の「F#」なんだ。子どもはそれをおぼえているから、雑音がいくら大きくても飛行機音が小さくてもパッとわかる。そのときの子どもはかわいかったねえ。みんな目隠しされておるのに、10人が一人も間違いなしにやるんだから。

（木村信之『音楽教育の証言者たち 上：戦前を中心に』音楽之友社，1986年，192-193頁）

1940（昭和15）年、佐藤の著書である『和音感教育』が三喜堂から発行される。佐藤は「はしがき」で「私の和音感教育の体験は僅々三ヶ年の短き実践に過ぎない。自分の耳で聴き、自分自身で体験した事柄を率直に記述したのが即ち本書である」と記す<sup>27</sup>。以下、『和音感教育』に所収されている保育実際案を取り上げ、さらには佐藤のSPレコードとの関係についても検討したい。

### 1) 保育実際案

幼稚園児に対する和音感教育の方法については、笈田や佐々木の実践同様、ドイツ音名が用いられた。佐藤は「幼稚園では、教育するというよりあそびせる。音感あそびであそぶものだから、子どもは夢中になっておぼえちゃった」と語り<sup>28</sup>、特に注意すべきこととして、以下の7点を挙げる。中でも「6、和音の聴音は出来るだけ他の作業と結びつけて行ふ事」とあり、単調な訓練のみで実践を行うことについて避けるよう指摘する。

＜和音感訓練をする場合特に注意すべき事＞

- 1, 一度に幾十返も連続聴音を行はぬこと。
- 2, 前和音の答が解つてから次の和音を聴くこと。
- 3, 主三和音の和音が、中々記憶が出来ないことを、早期に失望してはなりません。
- 4, 人真似や誤りを無暗に止めてはなりません。
- 5, 和音を弾く場合、ピアノを余り長くひいて居てはなりません。
- 6, 和音の聴音は出来るだけ他の作業と結びつけて行ふ事。
- 7, 出鱈目な高さ（ピッチ）で和音を歌はせない事、出鱈目な高さの音名を使用させぬ事。

(佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂, 1940年, 169-176頁)

では、佐藤はどのようなカリキュラムで和音感教育を行っていたのだろうか。表2は「一箇年の保育実際案」である。単音Cから指導が始まり、E, G, Cを教えた後、CEGの和音を取り上げられる。単音に関しては、下Hから上Fまで扱われ、幼児期の声域よりやや広い。特に上D, E, Fについては、ピアノの音に幼児の声を合わせるには無理がある。和音に関しては、I, IV, V, V7の基本形、第一転回形、第二転回形等が含まれている。今日の学校音楽教育では、小学校高学年でI, IV, V, V7を扱っていることから比較しても、幼児期の1年間でかなり多くの和音が指導されていることが分かる。

表2 「一箇年の保育実際案」

週	月 日	単音	和音	音符
1	4/19～4/23			
2	4/25～4/30	上C		
3	5/ 2～5/ 7	E		
4	5/ 9～5/14	G, C	CEG	
5	5/16～5/21	F		
6	5/23～5/28	A, D	CFA	
7	5/30～6/ 4	H		
8	6/ 6～6/11	下H	HDG	
9	6/13～6/18	上D		
10	6/20～6/25	上E, 上F		
11	6/27～7/ 2		GHD	
12	7/ 4～7/ 9		GHDF	
13	7/11～7/16			全音符, 全休符
14	7/18～7/20		FAC, EGC	



週	月 日	単音	和音	音符
15	9/ 5~ 9/10			
16	9/12~ 9/17		ACF	二分音符
17	9/19~ 9/24		GCE	二分休止符
18	9/26~10/ 1			
19	10/ 3~10/ 8			
20	10/10~10/15			
21	10/17~10/22		DGH	付点二分音符
22	10/24~10/29			四分音符, 四分休止符
23	10/31~11/ 5			
24	11/ 7~11/12			
25	11/14~11/19			
26	11/21~11/26			
27	11/28~12/ 3			
28	12/ 5~12/10		HDF	八分音符
29	12/12~12/17			
30	12/19~12/24			
31	1/ 9~ 1/14		HDFG	
32	1/16~ 1/21			
33	1/23~ 1/28			
34	1/30~ 2/ 4			
35	2/ 6~ 2/11			
36	2/13~ 2/18			
37	2/20~ 2/25		DFGH	
38	2/27~ 3/ 6			
39	3/ 8~ 3/13			
40	3/15~ 3/20			

出典 佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂, 1940年, 220-237頁から作成。

次に指導案を見てみたい。『和音感教育』では幼児を対象とした和音感教育初歩の指導案として、「(一) 和音感訓練 CEGの新授及音名位置の習熟」「(二) 椅子取り遊びに依る和音感訓練」「(三) 汽車遊び 防空演習に依る和音感訓練」「(四) 和音カードの音あて遊び」の4事例が紹介される<sup>29</sup>。これらの題材名においても4事例の内3事例において「遊び」の用語が使用され、佐藤が述べていた通り、遊びとの関連が図られていたことがうかがえる。紙幅の関係上、以下「(一) 和音感訓練 CEGの新授及音名位置の習熟」について取り上げる。

下記の指導案から歌で始まり歌で終わる音楽指導の典型的な方法で実践が行われていることが読み取れる。「3. 和音感訓練」に関しては、「ピアノの音にも、お名前をつけませうね」と投げ掛け、CEGの和音が指導され、その後、CFAとの聴き比べが行われる。その際、CEGの和音のときには起立をするように指示が出され、訓練というよりはゲーム感覚で指導が展開される。

「4」では、支那事変の話が用いられ、戦時色が表れている。ここでも訓練というよりは遊び感覚で、先ほどと同様にCEGとCFAの識別が繰り返し指導されている<sup>30</sup>。

●和音感訓練初歩の指導案（幼児案）

（一）和音感訓練 CEGの新授及音名位置の習熟。

目的 題材に示された通り。

方法

1. 既習唱歌（幼児の好むもの）

2. 音名位置のめくらさん遊び（略）

3. 和音感訓練

（イ）「皆さんの手にも、先生の手にも、お名前がつかしましたから、ピアノの音にも、お名前をつけませうね。之はCEGと云ふお名前です。さあ聴いて御覧。言つて御覧」（反復数回）

注意（和音の叩き方は反射的にしたり、ペダルを使用したり、又長く鍵盤上に手を置かぬこと。）

（ロ）ツエ、エ、ゲが分つたら今度はツエ、エフ、アの異つた和音を叩き、之は何に、と尋ねて見る。

（註＝ツエ、エフ、アの和音は本時には教へず、只ツエ、エ、ゲ、でない事を感じさせる為＝）

従つて幼児が若し『違ふ』とか『知らない』とか『無茶』とか答へたなら非常に愉快である。それは既に本時の第一目的であるツエ、エ、ゲの和音感がつき初めた事を物語るからである。

（ハ）ツエ、エ、ゲの和音感による遊び。

「ツエ、エ、ゲ、が鳴つたら椅子から早く立上るのですよ。もし間違つたら坐りなさい、と教へておきツエ、エ、ゲとツエ、エフ、アとを適宜にひき興味的に訓練をする。

4. 音名位置習熟及和音感訓練を併せ行ふ貼り方遊び、（支那事変に就てのお話）

（イ）「上のCはお空にしませう。ハイ、上のCへ飛行機を飛ばして御覧」

（ロ）「爆弾を下のCに落しませう」

（ハ）「おや凄いな音が聴えますよ。何んの音が知ら」ツエ、エ、ゲを叩きツエ、エ、ゲ、と言はしむ、次にGに命中、ツエ、エ、ゲ、を弾く。

（ニ）次に「Eに命中」今度はツエ、エフ、アをひく。此場合ツエ、エ、ゲでない事を聴き分けさせたい。

（ホ）作品観賞

5. 飛行機の歌の斉唱

（佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂、1940年、164-166頁）

## 2) SPLレコード

佐藤の和音感教育については、表3に示した通り日本ビクターからSPレコードが発売される。1942年に出版された山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』から、数あるSPレコードの中で佐藤の指導したSPレコードと「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」（コロンビア、前述）は早い時期に作成されたことが分かる<sup>31</sup>。発売年に関してはSPレコードには記載されていないけれども、『東京芸術大学百年史』によると「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」が出されたのが1941（昭和16）年5月である<sup>32</sup>。「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」では国民学校の教育内容に準拠して日本音名が使用されていた<sup>33</sup>。したがって佐藤のSPレコードは「東京音楽学校監修聴覚訓練用レコード」が発行される前の1940（昭和15）年ないしは1941（昭和16）年頃の時期に発売されたと考えられる。また山口は「佐藤吉五郎君が指導して堺市の児童が吹き込んだもので独逸音名を用ひて唱つてゐる。幼稚園児のものの方が参考になる点が多いと思ふ。全体の唱ふ声は美しいとは云はれない」と解説する<sup>34</sup>。



表3 佐藤吉五郎指導のSPレコード（日本ビクター）

番号	曲名	演奏	伴奏	指導
A-3085	幼稚園の音感(1) ハルノノアソビ	堺市幼稚園児	松川良子	佐藤吉五郎
A-3085	幼稚園の音感(2) ハルノノアソビ	堺市幼稚園児	松川良子	佐藤吉五郎
A-3086	幼稚園の音感(3) ハルノノアソビ	堺市幼稚園児	松川良子	佐藤吉五郎
A-3086	幼稚園の音感(4) ハルノノアソビ	堺市幼稚園児	松川良子	佐藤吉五郎
A-3087	国民学校の音感(1)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎
A-3087	国民学校の音感(2)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎
A-3088	国民学校の音感(3)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎
A-3088	国民学校の音感(4)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎
A-3089	国民学校の音感(5)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎
A-3089	国民学校の音感(6)	堺市国民学校五年児童	奥田亀太郎	佐藤吉五郎

出典 昭和館監修『SPレコード60,000曲総目録』, アテネ書房, 2003年, 347-348頁。

表4, 表5は, SPレコードA-3085を視聴し, 筆者によって文字化したものである。保育者と子どもたちの実践場面が録音されており, 保育者の声は関西なまりの女性で, 佐藤ではない。このSPレコードの特徴として, 第一に『和音感教育』の記述と共通する内容が多い, 第二に「一箇年の保育実際案」に掲載されている和音を基本的に使用している(掲載されていない和音: FGH, DCE, ADF, HCG)等が挙げられる。これらのSPレコードの使用方法については, 保育者と子どものやり取りが録音されていることから, 子どもに直接聴かせたのではなく, 保育者向けの研修の資料として活用されたのではないかと考えられる。

表4 日本ビクター A-3085 幼稚園の音感(1)

日本ビクター A-3085 幼稚園の音感(1) ハルノノアソビ	『和音感教育』
<p>T: さあ、みんなお手手を出してごらん。元気に指のおうちの唱歌を歌いましょう。</p> <p>♪ 《五指に依る音名唱歌練習唱歌》</p> <p>T: 今度は先生の弾くピアノの音をみんなで当ててごらんさい。</p> <p>C: CEG, HDG, CFA, GHDF, FAC, DGH, EGC, GCE, FGH, ACF (ピアノで1回、和音を弾いた後、子どもたちが一斉に答える)</p> <p>T: よろしい。では、岸とおるさん、一人と言ってごらん。</p> <p>C: はい。 HDG, FAC, EGC, DGH, GHDF</p> <p>T: 今度は渡辺たいすけさん。</p> <p>C: はい。 CEG, CFA, DCE, ADF, FGH</p> <p>T: そうです。二人とも大変よいお耳ですね。 では、これから春の野原のお遊びをいたしましょうね。</p> <p>C: はい。</p> <p>T: CEGは何でしたかしら。</p> <p>C: ツクシ。</p> <p>T: CFAは?</p> <p>C: タンポポ。</p> <p>T: HCGは?</p> <p>C: スミレ。</p> <p>T: 雨は?</p> <p>C: GHDF。</p> <p>T: 子どもは?</p> <p>C: GCE。</p> <p>T: 風は?</p> <p>C: FGH。</p> <p>T: そうね。</p>	<p>p. 132 音名指導 ※ p. 134</p> <p>p. 165 和音感訓練</p>

注 T: 指導者, C: 子ども。

※の箇所は、北山ナホ(1941) 幼児の和音感教育の実際. 国民保育協会(編) 月刊国民保育 第1巻 第4号. フレーベル館. 61-63, の記載と共通する。

表5は、遊戯を取り入れた和音感訓練の実践である。子どもたちは、「お日様」「風」「雨」「ツクシ」のグループに数名ずつ分けられる。これらのグループには表5の通り、和音が付けられ、自分の所属するグループの和音が鳴ったら、グループ名に合った擬音語と動作を加えながら前が出る決まりになっている。指導者はピアノを使用してスキップのリズムのように和音を弾く。「ツクシ」に対する指導者の言葉掛けから、子どもたちはしゃがんだり、手を伸ばしたりと音に合わせて体全身を使って表現していることが想像できる。佐藤は「面白く幾回も反復練習になり、同時に和音の記憶に、無意識的に努力する頭の働きになる」と動作遊戯を評価する<sup>35</sup>。

『和音感教育』との関係性については、173から175頁に掲載されている遊戯「小さな庭」とほぼ同様の実践である。ここでは、CEG：お日様、CFA：蝶々、GHDF：雨、FAC：水かけ、EGC：蜜蜂、HDG：朝顔と記され、SPレコードとは異なる組み合わせとなっている。とはいえ、実践の進め方はほぼ同じである。

表5 日本ビクター A-3085 幼稚園の音感(2)

日本ビクター A-3085 幼稚園の音感(2) ハルノアソビ	『和音感教育』
<p>T：では、これは何でしょう？  C：DGH お日様。EGC ヒマワリ。FAC 蝶々。  T：ACFは何でしたかしら？  C：桜の木。  T：そうね。よく分かりましたね。みんな、冠をつけてご用意ができましたね。  C：はい。  T：早く春が来るように、一度元気よく、《春よこい》の唱歌を歌って春を呼びましょう。</p> <p>♪ 《春よこい》</p> <p>T：さあ、音感遊びをいたしましょう。  自分の音が鳴ったら、音の名を言って出ていらっしやいね。  C：はい。  DGH お日様。 ニコニコニコニコニコニコニ…。  FGH 風。 ホンノリホ、ホンノリホ…。  GHDF 雨。 ジャージャー。  CEG ツクシ。  T：ツクシはしゃがんでいましたが、うんとお手手を伸ばしてだんだん大きくなってきましたね。  C：HDG スミレ。  T：スミレもかわいいお花が咲きましたよ。  C：CFA タンポポ。  T：タンポポのお花もかわいいのが咲きましたね。</p>	<p>p. 173-175  遊戯「小さな庭」</p>

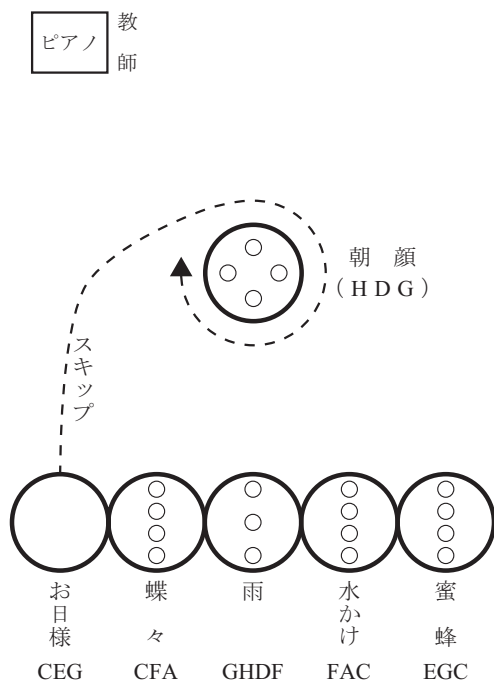


図1 遊戯「小さな庭」

出典 佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂，1940年，174頁。

### おわりに

以上、佐藤の行った幼児への和音感教育実践について、「保育実際案」やSPレコードを基に検討した。

和音感教育の実践を行った堺市視学に転出する以前の職であった岡山県女子師範学校は、保育者養成としての機能も有していた。しかし、佐藤が附属幼稚園等で特別な実践を行っていたというわけではなかった。佐藤は師範学校の生徒の音楽指導に苦勞しながら、移動ド唱法に対する不信を抱き始めた。そのような状況の中、佐藤は音楽設備の整備を図りながら授業のみならず放課後も音楽指導に没頭していた。

1935（昭和10）年、佐々木の実践の影響を受け、堺市において和音感教育を実施する。佐藤の幼児への和音感教育実践の内容は、I、IV、V、V7の基本形、第一転回形、第二転回形の和音を中心に扱われ、1年間でかなり多くの和音が指導されていた。笈田や佐々木の実践同様、ドイツ音名が使用された。指導方法としては機械的な訓練だけではなく、歌や遊びも取り入れられていた。佐藤指導のSPレコードは、数ある聴覚訓練用のSPレコードが発売される以前に作成され、先駆的な存在であった。内容は『和音感教育』に準拠し、歌や遊びを通して実践されている場面が録音されていた。ただし、このSPレコー

ドは子どもを対象とした教材ではなく、保育者向けの研修の資料として活用されたと考えられる。

ところで、佐藤は1943（昭和18）年、海軍対潜学校の艦船水中音測定の主任教官として就任した<sup>36</sup>。十代の将兵対象に訓練を開始したものの、思うように成果が上がらなかった<sup>37</sup>。佐藤は「テストの度に、私は堺市の幼稚園児の顔がチラチラ思い浮かんだ」と回想する<sup>38</sup>。このことから幼児期に限ってのみ、佐藤の和音感教育が有効であったことが示される。

このように佐藤の実践は、戦時体制という当時の社会情勢と迎合し、着目された。佐藤は岡山県女子師範学校、堺市視学、海軍対潜学校、神奈川県鎌倉市立玉縄小学校と異動を重ねながら、いずれも共通することは「実践」を通して音楽指導を追及している点である。特に堺市視学のときには、行政の職務に限定するのではなく、堺市の小学校20校、幼稚園5園で和音感教育の実践を先進的に実施した。その成果を『和音感教育』にまとめ、さらにはSPレコードまで作成し、音源資料でも普及を図った。佐藤自身、秋田県師範学校出身、小学校教職経験ありという経歴が、教育実践との距離を縮めさせたのだろう。

今回、SPレコードの分析の対象を「幼稚園の音感」に絞った。今後、「国民学校の音感」（A-3087～9）についても分析し、幼児期と児童期における指導方法の比較についても行っていきたい。さらには、戦後の神奈川県鎌倉市立玉縄小学校の実践との関係性についても考察したい。

酒田富治によると、戦前の同時期に、日本女子大学付属幼稚園をはじめとして他の幼稚園でも音感教育が熱心に行われていた<sup>39</sup>。また、上田によると、神奈川県中郡大磯町において幼稚園と国民学校の連携が図られた音感教育の実践がなされていた<sup>40</sup>。その他、松本園子によると、1941（昭和16）年、「保育問題研究会」の中に「音楽部会」が組織され、部会の研究テーマとして「先ず音感教育をば幼稚園、託児所にて、簡単にして取入れること」が掲げられた<sup>41</sup>。今後は、佐藤の実践が他の幼稚園へ及ぼした影響等についても調査を広げていきたい。

## 謝辞

本稿を作成するにあたり、元岡山県女子師範学校附属小学校訓導の恒次恒次氏、昭和館映像・音響室から資料の提供を得ました。ここに記して、感謝の意を表します。

## 付記

本稿は日本音楽教育学会第38回大会（2007年、於：岐阜大学）において口頭発表したものを加筆・修正したものである。

## 注

- <sup>1</sup> 磯田三津子「佐藤吉五郎」日本音楽教育学会編『日本音楽教育事典』音楽之友社, 2004年, 398頁。
- <sup>2</sup> 石川謙代表『近代日本教育制度史料』第二巻, 大日本雄弁会講談社, 1956年, 235頁。
- <sup>3</sup> 文部省『師範学校教科教授及修練指導要目』1943年。
- <sup>4</sup> 鈴木慎一郎「香川師範学校男子部における聴覚訓練の実践: 1941~45年を中心に」日本音楽表現学会編『音楽表現学』Vol. 4, 2006年, 79-94頁。
- <sup>5</sup> 文部省は「聴覚訓練準備調査会」を設置。1941(昭和16)年, 藤田敏彦(主査), 田辺尚雄(副主査), 井上武士, 城多又兵衛, 小松耕輔, 小出浩平, 颯田琴次, 下総皖一, 橋本国彦, 橋本清司, 松島彝が委員を委嘱。このうち橋本国彦は辞任し, 1943(昭和18)年に佐藤吉五郎が追加される。井上武士「音名問題のいきさつ」『教育音楽 小学版』12月号, 音楽之友社, 1963年, 47頁。
- <sup>6</sup> 村田千尋「戦後における唱法論争を省みる唱法再考のために」東川清一・海老沢敏編『よい音楽家とは: 読譜指導の理論と実践』音楽之友社, 1996年, 211-212頁。
- <sup>7</sup> 真篠将『音楽教育四十年史』東洋館出版社, 1986年, 370-375頁。
- <sup>8</sup> 『文部省発表 小学校学習指導要領各教科改定案』明治図書, 1958年, 174頁。
- <sup>9</sup> 大地宏子「『個人レッスン』とコンクール: ピアノを中心に」河口道朗監修『音楽教育史論叢 第II巻 音楽と近代教育』開成出版, 2005年, 284-285頁。
- <sup>10</sup> 木村信之『音楽教育の証言者たち 上: 戦前を中心に』音楽之友社, 1986年, 238-246頁。
- <sup>11</sup> 山下薫子「音感教育の功罪」河口道朗監修『音楽教育史論叢 第I巻 音楽の思想と教育』開成出版, 2005年, 208-224頁。
- <sup>12</sup> 上田誠二『音楽はいかに現代社会をデザインしたか: 教育と音楽の大衆社会史』新曜社, 2010年, 281-282頁。
- <sup>13</sup> 磯田前掲書, 398-400頁。
- <sup>14</sup> 湯川嘉津美「保育者養成」久保義三・米田俊彦・駒込武・児美川孝一郎編『現代教育史事典』東京書籍, 2001年, 68頁。
- <sup>15</sup> 岡田正章監修『大正・昭和保育文献集』第十三巻, 日本らいぶらり, 1978年, 49頁。
- <sup>16</sup> 岡山県保育史編集委員会『岡山県保育史』フレーベル館, 1964年, 223-224頁。
- <sup>17</sup> 永井理恵子『近代日本幼稚園建築史研究: 教育実践を支えた園舎と地域』学文社, 2005年, 378-398頁。
- <sup>18</sup> 関連する先行研究は以下の通り。
  - ・竹田宏子「岡山県の師範学校における保育者養成史の研究(第一報)」中国四国教育学会編『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第38巻第1部, 1992年, 78-83頁。
  - ・竹田宏子「岡山県の師範学校による保育者養成史の研究(第二報)」中国四国教育学会編『中国四国教育学会 教育学研究紀要』第39巻第1部, 1993年, 82-87頁。
 1908(明治41)年4月から1933(昭和3)年9月まで, 岡山県女子師範学校附属幼稚園主任保母として岡政が務めていた。岡は「幼児の生活に保育の目的を近づけていく」ことを主張した。「京阪神総合保育会での岡政の発表」『京阪神総合保育会雑誌』47号, 1924年。附幼100周年記念誌編集委員会編『附幼百年のあゆみ: 創立100周年記念誌』岡山大学教育学部附属幼稚園, 1985年, 22頁。
- <sup>19</sup> 2005年6月3日 於: 岡山県和気郡和気町。岡嶋信夫氏(岡山師範学校卒業生)も同席。関連する資料は以下の通り。恒次恒次「音楽は一生の趣味」中田吉昭編『恒次恒次先生百年記念誌』2005年, 15-16頁。



- 20 佐藤吉五郎「戦中の音感教育：現場からの証言」『日本の音楽教育』音楽之友社，1975年，74-75頁。
- 21 磯田前掲書，399頁。
- 22 佐藤前掲書，1975年，74頁。
- 23 笈田光吉『絶対音感及び和音感教育法』上・中・下，シンキョウ社，1937年。
- 24 木村前掲書，188-189頁。
- 25 同書，75頁。
- 26 東京芸術大学百年史編集委員会編『東京芸術大学百年史 東京音楽学校篇』第二巻，音楽之友社，2003年，312頁。
- 27 佐藤吉五郎『和音感教育』三喜堂，1940年，4頁。
- 28 同書，192-193頁。
- 29 同書，164-176頁。
- 30 佐藤の和音感教育の方法は，堺市立第一幼稚園長の北山ナホによって以下の通り実践報告されている。
- ・北山ナホ「幼児の和音感教育の実際」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第4号，フレーベル館，1941年，61-63頁。
  - ・北山ナホ「幼児の和音感教育」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第5号，フレーベル館，1941年，53-59頁。
  - ・北山ナホ「和音感教育の実際」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第6号，フレーベル館，1941年，60-64頁。
  - ・北山ナホ「幼児の和音感教育の実際（四）」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第7号，フレーベル館，1941年，56-59頁。
  - ・北山ナホ「和音感教育九月の実際」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第8号，フレーベル館，1941年，92-96頁。
  - ・北山ナホ「和音感訓練」国民保育協会編『月刊国民保育』第1巻第11号，フレーベル館，1941年，56-59頁。
  - ・北山ナホ「和音感教育三月の実際」国民保育協会編『月刊国民保育』第2巻第2号，フレーベル館，1942年，58-61頁。
- 31 山口保治『国民学校と家庭に於ける聴覚訓練』照林堂書店，1942年，32頁。
- 32 東京芸術大学百年史編集委員会編前掲書，822頁。
- 33 鈴木前掲書，84-86頁。
- 34 山口前掲書，32-34頁。
- 35 佐藤前掲書，1940年，175頁。
- 36 佐藤前掲書，1975年，77頁。
- 37 同書，77頁。
- 38 同書，78頁。
- 39 酒田富治『幼児の音感教育』共同音楽出版社，1981年，393頁。
- 40 上田前掲書，283-288頁。
- 41 松本園子『昭和戦中期の保育問題研究会：保育者と研究者の共同の軌跡 1936-1943』新読書社，2003年，277頁。